

## 小学校教員の英文法および英語学トピックへの関心度 —平成 29 年度岩手大学免許法認定講習より—

犬塚 博彦

### 1. はじめに

本稿は、小学校における英語教科化を視野に入れて、平成 29 年度に岩手大学教育学部で実施された中学校英語二種免許取得を目ざす小学校教員対象の免許法認定講習において、筆者が担当した「英語の文法 B (英語学)」講義の最後の時間に受講者に書いていただいた「振り返り」記録から、現職小学校教員の英文法・英語学トピックへの関心度を分析し、その背景について考察を加えたものである。

### 2. 「英語の文法 B (英語学)」講義について

#### 2. 1 概要

「英語の文法 B (英語学)」は、岩手大学において平成 28 年度から 3 年間の計画で始まった「岩手大学免許法認定講習」において、英語学領域で 3 科目設定されているうちのひとつである。前年度は「英語の文法 A (英語学)」という科目が別の担当教員によって開講され、そして今年度は筆者が「英語の文法 B (英語学)」を担当することになった。本講習は、平成 29 年 9 月 16 日 (土) と 17 日 (日) の二日間、計 16 時間 (90 分授業で計 8 回) 岩手大学教育学部において実施された。受講者はすべて現職小学校教員で計 29 名、その勤務地は 28 名が岩手県内、1 名が青森県内の小学校であった。

#### 2. 2 講義展開の構想

本講義を展開するにあたっては、大学で行われる通常の講義と異なり、以下の点を十分に考慮しなくてはならなかった。すなわち、(1) 現職の小学校教員を対象とするのであって、大学生を対象とするものではないこと、(2) その多くは学生時代に英語専攻ではなかった人たちを対象とするものであること、(3) 集中講義でしかも講義時間が限られていること、である。また、科目名が「英語の文法 B (英語学)」となっており、英文法と英語学の両方が科目名に含まれていることから、英文法と英語学の比重をどうするかとか、それぞれのトピックを取り上げるかについても事前に吟味しなければならなかった。

そこで、まず参考のために、平成 28 年度「英語の文法 A (英語学)」の担当教員に昨年の様子を伺ってみたところ、「前年度『英語の文法 A (英語学)』受講者の中には、(英文法に加えて) 英語学の内容をもっと知りたいと思った人が

多かったようだ」という情報が得られた。この言を受けて、今回の「英語の文法 B (英語学)」は英語学のウエイトを高くする方向で、英語学と英文法の両方に関連するトピックに着目して講義展開をするということで、大まかな方向が定まった。

このうち、英文法に関しては、「語」を扱う品詞論と「文構造」を扱う構文論の2つの側面のうち、前者については、母語である日本語とはその捉え方の違いが顕著に表れる「名詞」をめぐる諸問題を中心に展開することにした。一方、後者については、文構造研究を通して見えてくる「英語らしさの追究」をテーマとして設定することにした。また、英語学に関しては、現代英語のしくみをより深く理解するために、必要な範囲で英語史的な知識をも提供することにした。

いずれにしても、講習の時間数が限られているために、英文法・英語学すべてを網羅するということはせず、受講者がそれまでの英語学習の過程で疑問を抱いていたであろうと思われるトピックを抽出し、講義を通して理解をより深めてもらえるようになることを心がけた。つまり、受講者にとって「驚きと発見」につながるような知識を伝授し、講習後は、それぞれの受講者が自主的にさらなる英語研究を進めていけるような道筋を提示することに主眼を置いた。

### 3. 英文法・英語学トピックへの関心度調査について

「英語の文法 B (英語学)」の講義は、全体を通して受講者にとって初めて聞くであろうと思われる内容を数多く用意したので、2日目の最後の授業時に「振り返り」の時間を設けることにした。具体的には、60分という時間設定をして、受講者にとって新たな学びとなり、かつ特に関心を持ったトピックについて、その内容を講義時に配布された資料や筆記ノート等を参照しながらまとめてもらうことにした。これには、「振り返り」のまとめをしながら受講生がそれぞれ自分の理解を確認していただくという意味合いも込めていた。このほか、各自が考えたことなども自由記述で書いてもらうことにした。なお、トピックをいくつ取りあげるかについてはこちらでは特に指定せず、受講者の判断に任せることにした。

### 4. 調査結果の分析と考察

以下、筆者が「英語の文法 B (英語学)」において取り上げたトピックごとに、講義での着眼点を概観したあと、関心度調査の結果について触れ、そのような結果が現われた背景について、受講者による「振り返り」の記述内容とあわせて考察することにする。その際、受講者が「英語について新たな知識を吸収する学徒としての自分」という視点で記述しているのか、あるいは「小学校で子どもたち

に英語を教える教師としての自分」という視点で記述しているのかについても考察することにする。

#### 4. 1 「アルファベットの成り立ち」【文字論】

##### 4. 1. 1 概要

筆者の講義で最初に取り上げたトピックは「アルファベットの成り立ち」についてであった。その理由は、小学校における外国語活動において教師が子どもたちに最初に教える項目はアルファベットであることから、受講者を本講義にいざなう最初のトピックとしても相応しいと考えたからである。

筆者は、あらかじめ作成しておいた「アルファベットの起源を探る」と題した書き込み式のプリント資料を講義時に配布し、受講者は講義を聞きながら空所を補充して理解を深めてもらう方式をとった。併せて、フェニキア文字からギリシア文字、そしてエトルリア文字を経てラテン文字に至るその変遷が、視覚的に直感で把握できるように、西田(1989)に基づいた資料をもとに解説を加えた。

##### 4. 1. 2 調査結果および考察

本トピックを「振り返り」の際の自由記述に含めた受講生は、全受講生29人のうち、15名(52%)であり、後述する他の項目よりも数値が圧倒的に高く、半数を越える受講生がこのトピックに新たな学びを見出していた。

関心度が高かった背景には、(1)さまざまな文字の比較は、視覚的にも直感でしかも理屈抜きで捉えやすいということ、(2)素材としても小学校の外国語活動でそのまま使える内容でもあるということがその要因であると筆者は考えた。自由記述の中に見られた「自分が楽しんで教えられそうだった」(A教諭)という言葉がそれを物語っていると言える。

#### 4. 2 「英語はどのような言語か」【印欧語比較言語学】

##### 4. 2. 1 概要

本トピックは、印欧諸語の一つとしての英語の姿の一端を描き出すことを目的とした。具体的には、ゲルマン語派(英語・オランダ語・ドイツ語)とラテン語派(フランス語・イタリア語・スペイン語・ポルトガル語・ラテン語)の計8言語の数詞(1~10)の資料を、言語名を伏せた状態で提示して、それが何語かをクイズ形式で見当をつけてもらうことにした。少し勘をはたらかせれば言語間の語形の類似性に気づくのであるが、受講者にはそれがさらに二つのグループに分けられそうだということに気づいてもらい、印欧語の系統の話へと受講者をい

ざなうことにした。

#### 4. 2. 2 調査結果および考察

本トピックを「振り返り」の際の自由記述に含めた受講者は、全受講者29人のうち、7名(24%)であった。本トピックの資料には英語以外の言語データが含まれ、一見したところ、英語そのものには関連が薄いようにも思われるのであるが、これを新たな学びとして自由記述の中で言及した受講生は筆者が予想していたよりも多かった。その理由は、筆者が講義の中でラテン語の「7」(septem)、「8」(octo)、「9」(novem)、「10」(decem)に言及した際に、その綴り字が英語のSeptember(9月)、October(10月)、November(11月)、December(12月)を連想することに注意を促した上で、数字の対応のずれは、現在の3月を起点とする古代ローマ暦の月の数え方に起因するという話をしたことが受講者の知的好奇心を引き出したものと考えられる。これに関連して受講生の中のB教諭はその自由記述の中で、「これを知って子どもの前に立つのと立たないのでは大きな違いがあるように思った。…(中略)…このような知識があればもっと英語を多角的に見て子どもたちに伝えることができる。それによって、英語だけでなく他の外国語に興味をもつ子どもが出てくるかもしれない。」と述べている。

#### 4. 3 「英語の史的変遷に関する諸トピック」【英語史】

##### 4. 3. 1 概要

筆者は、受講者が中学・高校時代の英文法学習において、「不規則」や「例外」扱いで個別に暗記したであろうと思われる項目のうち、英語の史的変遷の観点で説明がつくものを取り上げて、受講者の英語に対する知的好奇心を引き出す工夫をした。具体的には、(1)名詞の複数形のうち、現代英語的には「不規則」に見えるものを2件[①“foot~feet”語形変化関連で、古英語以前の「i-ウムラウト」、および、②“child~children”語形変化関連で「古英語-ru 複数」((OE) cild-ru > (ME) childre > (PE) children)]を取り上げた。(2)発音と綴り字のずれに関連して「大母音推移(Great Vowel Shift)」を取り上げた。この他に英語史関連としては、(3)「古英語の語形変化表」の資料を配布して、古英語の名詞・人称代名詞・定冠詞・指示詞のそれぞれの語形がその後どのように変化していったかを概観した。

#### 4. 3. 2 調査結果および考察

前項であげた3つのトピックのうち、「i・ウムラウト」を「振り返り」の自由記述に含めた受講者は、全受講生29人のうち5名(17%)、「古英語・ru複数」を自由記述に含めた受講者は、3名(10%)であった。これに対して、「大母音推移」については13名(45%)で半数に近い受講者が新たな学びと位置づけており、大母音推移は英語史関連では関心度が極めて高いトピックであることが明らかになった。大母音推移について、C教諭はその自由記述の中で、「中学の時、ローマ字読みとのギャップに悩んだことを思い出しました。…(中略)…私にとっては今後の学びや指導につながる重要な知識となりました。」と述べている。この他にD教諭は、「中学高校の頃は何も考えずに単語を覚え(たが、…(中略)…今、大人になり、(英語の)歴史などへの興味や物事の変化など、ある程度、すそ野の広い知識があつて学ぶと深みが増すように思われる。」と自由記述の中で述べている。ところで、大母音推移への関心度の高さと対照的に、前項末で触れた「古英語の語形変化表」について自由記述で触れた受講者は皆無であった。これは、古英語の語形変化表をその日はじめて見たという受講者がほとんどだったと思われるので、性・数・格によって語形が変わるという説明を受けても、理解がなかなか容易ではなかったというのが実情のようであった。

#### 4. 4 「イギリス英語とアメリカ英語」【英語学】

##### 4. 4. 1 概要

講義では、イギリス英語とアメリカ英語の違いについて、事例研究の一環として、(1)母音の発音の違い(“ask”など)、(2)単語固有の発音の違い(“tomato”など)、(3)綴り字の違い(“colour/color”など)、(4)語彙の違い(“petrol/gasoline”など)、(5)文法(“Have you any money?”のイギリス用法など)、英米でその違いが顕著に表れるものについて概観した。

##### 4. 4. 2 調査結果および考察

「イギリス英語とアメリカ英語」を「振り返り」の自由記述に含めた受講者は、全受講者29人のうち、わずか4名(14%)に過ぎなかった。このうちの3名が上記(2)単語固有の発音の違いとして、“tomato”の英米での発音の違いについて触れていた。筆者の予想に反して「イギリス英語とアメリカ英語」の違いについて触れた受講者が少なかったのは、これまでのいずれかの時点ですでに一度は聞いたことがある話が多かったために新鮮味に欠けると感じるころがあったためではないかと推定される。

#### 4. 5 「ことばについて考えるということ」【認知言語学】

##### 4. 5. 1 概要

講義では「ことばとは何か」という発問をし、古代ギリシアの精神的遺産である「ロゴス」の原義を確認したあと、目の奥に映った映像を言葉に直すということを語句レベルと文レベルでみずから体験してもらった。このうち語句レベルでは、或る模様を見せて、まずはそれを日本語に直してもらい、次に英訳したものをもとの日本語と比較してその表現の仕方の違いを吟味してもらった。一方、文レベルでは、阿部(1998:1-3)で紹介されていた文例（「太陽は東から昇り、西に沈む。」“The sun rises in the east and sets in the west.”）を参考にして日英語対照の観点から、物理的には同じ現象であっても、そのどの部分を切り取って言葉に直すかというその直し方が言語によって異なるということを説明した。

##### 4. 5. 2 調査結果および考察

前項で触れた「言葉に直す」という作業のうち、語句レベルについて「振り返り」の自由記述で触れた受講者は、全受講者29人のうち、わずか5名（17%）であった。一方、文レベルについて触れた受講者はそれよりも多く、8名（28%）であった。このうちの3名（10%）については語句レベルと文レベルの両者を関連づけて記述していた。「言語化・概念化」の問題を、文レベルの観点でまとめた受講者が多かったのは、講義で使った“The sun rises in the east and sets in the west.”という英文が高校英文法ではおなじみの英語表現であるので、語句レベルの話を使って説明するよりは、むしろ文レベルの話のほうがまとめやすかったという事情がその背景にあるものと推測される。

#### 4. 6 「言語学の基本概念」【一般言語学】

##### 4. 6. 1 概要

ソシュールの「体系(system)と価値(linguistic value)」とマルティネの「二重分節(double articulation)」を取り上げた。このうち前者においては、「体系が異なれば価値も異なる」というソシュール言語観の中でも最重要項目の一つとされるこのトピックを、筆者は「日本語の『私』と英語の“I”とは同じではない」というごく身近でかつ受講者にとっては新たな気づきとなる事例を使って説明した。

##### 4. 6. 2 調査結果および考察

「振り返り」の自由記述でこのトピックに触れた受講者は、「体系と価値」が全受講生29人のうち、わずか2名（7%）、「二重分節」では1名（3%）し

かいなかった。上掲の事例は日英語の違いを理解する上で格好の素材であると筆者は思っていたのだが、こちらの予想に反して、受講者のこのトピックに対する関心の優先度は低かった。言語学の基本概念については、受講者にとっては数多くのトピックがある中で関心が後回しになっているように見受けられた。

#### 4. 7 「語の内部のしくみ」【形態論】

##### 4. 7. 1 概要

形態論関連では、「形態素と異形態」、「音韻的に条件づけられている異形態」、「語彙的に条件づけられている異形態」、「自由形態素と拘束形態素」について触れ、語形成に関しては「屈折と派生」、「語幹と接辞」を取り上げた。

##### 4. 7. 2 調査結果および考察

受講者による「振り返り」の自由記述の中で、何らかの形で形態論について言及しているのは全受講者29人のうち8名(28%)であって、数値的には決して少なくはないのであるが、特徴的なのは、こちらが期待していたように小トピックを相互に関連づけてまとめていたのはわずか3名(10%)に過ぎず、他は小トピックを断片的に触れたに過ぎない内容となっていた。

#### 4. 8 「英語らしさの追究」【英語構造論】

##### 4. 8. 1 概要

筆者は、二日間の認定講習という極めて限られた日程の中で、受講者たちに母語である日本語とは異なる英語構造の特徴を端的に理解してもらおうと考えて、「英語らしさの追究」というトピックを立てた。具体的には、(1)「使役性」、(2)「簡潔性」、(3)「構造美」の3点である。このうち、(1)については「ものが人を～させる」という構造をとる英語に特徴的な無生物主語構文、(2)については、「気の利いた名詞表現を使いこなす」という意味での名詞化表現、(3)については「文内における語配置のバランス」について、それぞれ文例資料をもとに、「英語は構造を重視する言語である」ということを説明した。

##### 4. 8. 2 調査結果および考察

受講者による「振り返り」の自由記述の中で「英語らしさの追究」について触れていたのは、全受講生29人のうち、11名(38%)で比較的多く、これはこちらの予想どおりの結果となった。授業で紹介した文例は、無生物主語構文や名詞化表現を含む英文など、受講生にとってはすでに高校の英語学習の段階でな

じみのある文例ばかりなのであるが、関心度が高かったその背景として、こうした文法項目を「英語らしさ」という観点から一つにくくられたことで、ある意味での新鮮さでもって受け止められたからだと考えられる。「英語らしさの追究」というトピックは、受講者たちにとってもインパクトがあったらしく、受講者からの次のような記述がそれを物語っている。「英語らしさ、つまり英語の特徴をつかむことが非常に重要なことで、その事（使役性・簡潔性・構造美）を理解することで、英語の良さと同時に楽しさが身に付いてきます。この三要素の追及を私たち英語の指導者になるものは目指していかなければいけないと思いました。」(E教諭)。「これからのテーマにしたいと思っている。」(F教諭)

#### 4. 9 「名詞と冠詞」【品詞論】

##### 4. 9. 1 概要

品詞論に関しては、柏野(2010)を参考に、名詞については「可算/不可算」「具体/抽象」、冠詞については“a/the”をめぐる基本的な捉え方を事例に即して説明した。講義では名詞と冠詞を別々に切り離して扱うことはせず、両者の諸特徴を関連づけながら説明を加えた。

##### 4. 9. 2 調査結果および考察

「名詞と冠詞」に関するトピックでは、全受講者29人のうち、「振り返り」の自由記述で「名詞」のことに焦点を当てた人は7名(24%)であったのに対し、「冠詞」についてはわずか2名(7%)であった。このうち、「名詞と冠詞」の両者を関連づけてまとめた受講者はわずか1名(3%)に過ぎなかったのは意外であった。冠詞の問題(a/the/φ)よりも名詞をめぐる諸問題(「具体/抽象」「可算/不可算」)のほうが受講者の関心度が高かったのは興味深い。その背景には、品詞としての名詞は日英両言語に存在するが、英語のほうは対象となるものをどう捉えるかによって、「具体/抽象」等の観点によりそれが「可算/不可算」として語形に反映されるという話が、より新鮮な驚きでもって受けとめられたことが反映していると考えられる。

#### 5. 結語

以上本稿では、平成29年度に岩手大学教育学部で実施された小学校教員対象の免許法認定講習において、筆者が担当した「英語の文法B(英語学)」を通して見えてくる受講者たちの英文法・英語学トピックについての関心度を分析し、考察を加えてきた。その結果、以下のことが明らかになった。

受講者の関心度が高かったのは、「アルファベット成り立ち」のように、(1) 資料を通して視覚的に直感でそのしくみが捉えられやすいものであり、かつ、(2) 素材としても小学校の外国語活動でそのまま使えるようなトピックであることが明らかになった。これは、受講者が「英語について新たな知識を吸収する学徒としての自分」と「小学校で子どもたちに英語を教える教師としての自分」という二つの視点を重ねあわせて講義を聴いていたということが背景にあると考えられる。

その一方で、「英語らしさの追究」のように、新たな切り口（「使役性」、「簡潔性」、「構造美」）で英語の構造を描き出したトピックについても受講者の関心度が高かったことが明らかになった。ここにおいては、受講者は「小学校で子どもたちに英語を教える教師としての自分」としてではなくて、「英語について新たな知識を吸収する学徒としての自分」という姿勢で向き合っていたものと考えられる。

いずれの場合も、受講者にとって「驚きと発見」につながるような知識の伝授を心がけ、講習を一つのきっかけとして受講者が今後自主的にさらなる英語研究を進めていけるような講義内容となっていることが重要であるということが本論考を通して明らかになった。

#### 参考文献

- 阿部一.『ダイナミック英文法』, 東京: 研究社, 1998.
- 江川泰一郎.『英文法解説』. 東京: 金子書房, 1991.
- 風間喜代三.『ギリシア語とラテン語』. 東京: 三省堂, 1998.
- 柏野健次.『英語語法レフェレンス』. 東京: 三省堂, 2010.
- 亀井孝他編.『言語学大辞典第6巻 術語編』. 東京: 三省堂, 1996.
- 佐々木高政.『和文英訳の修業』, 東京: 文建書房, 1952.
- 瀬谷廣一.『語根中心英単語辞典』. 東京: 大修館書店, 2001.
- 西田龍雄編.『世界の文字』. 東京: 大修館書店, 1989.
- 安井稔.『英語学概論』. 東京: 開拓社, 1987.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable. A History of the English Language. London: Routledge, 1993.

(岩手大学教育学部英語教育科)